

所	属	国際地域学研究科 国際観光学専攻 2年 3820161004番
氏	名	李 梁
学 位 の 種 類		修士 (国際観光学)
学 位 論 文 題 目		文化的景観の保全と観光に関する一考察 —世界遺産紅河ハニ棚田を事例として—
論 文 審 査 委 員		主査 藤稿 亜矢子      副査 古屋 秀樹

## 論 文 要 旨

The rice terraces (Tanada) is one of the typical cultural landscape —a harmonious combination of the works of nature and humans. And for its conservation and protection, three rice terraces landscapes in the world are registered to the World Heritage in recent years. However, due to its world heritage status, the rice terraces landscape has become widely known, and the development by tourism on the locale has also become increasingly prominent. Based on the existing literature, keeping a watchful eye on the impact, especially the adverse effects caused by tourism development is very important.

In this research, the author studied ways to balance the conservation of cultural landscape and the use of tourism, with regards to the effects upon and involvement of local communities. The Honghe Hani rice terraces landscape is taken as a case, which is the latest rice terraces landscape to be recognized as a UNESCO World Heritage Site. To gather data from the local communities, the author employed participant observation, did semi-structured interviews, and structured questionnaire. As a result, the author found that tourism started to threaten local tradition and culture of ethnic groups, although the local community still have strong connections to rice terraces as their spiritual bastion. It could be an important trigger to promote rice terraces conservation and sustainable tourism there. Finally, recommendations were presented in order that tourism should not damage indigenous culture of local communities but contribute to satisfy their spiritual needs.

Keywords : Rice terraces, Cultural landscape, Conservation, Tourism, Local community

キーワード：棚田、文化的景観、保全、観光、地域コミュニティ

### 1. 研究の背景

棚田は代表的な二次的自然の一つであり、人が関わることで維持される自然環境であることから、人との関わりが無くなることはその消失を意味する。このように人と自然との関わりから生まれる調和的景観は、近年文化的景観として世界遺産条約の中でも注目されており、棚田景観も次世代へと継承していくための保護が世界で推進されている。しかし、棚田景観が世界遺産となり、広く知られる一方、観光による開発も始まっている。先行研究より、観光が地元で肯定的影響を与えると同時に、否定的影響も与えることがわかっているため、棚田のような文化的景観の保全と、観光による利用のバランスをとり、地域社会の持続可能な発展をもたらすことは、重要な課題である。

### 2. 研究の目的

本研究では、棚田として最新の世界遺産である、紅河ハニ棚田を研究対象として、地域住民の視点から文化的景観と観光のあり方を考察する。地域住民の視点が重要な理由は、まず文化的景観形成の主体であること、また世界遺産で許容される観光形態であるエコツーリズムにおいても、地域住民が主体となるべきとされていることからである。紅河ハニ棚田は、そこに住んでいる多様な少数民族に代々受け継がれ営まれており、棚田と地域コミュニティが一体となって生活、伝統、二次的自然を含む文化的景観を作り出してきた。観光がこのような文化的景観を壊すことなく、むしろその保全に貢

献するためにはどのような施策が必要なのかを検討するために、現状の課題や肯定的要因を明らかにし、他の類似事例と比較、検証することで、今後の政策の一助となることを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下の方法を用いて行った。a.文献調査：文化的景観、棚田、棚田観光に関する文献資料また先行研究を収集、レビューし、文化的景観保全のための理論を構築した。また、棚田保存のさまざまな試みが行われてきた日本の事例や世界遺産の他の棚田の事例を整理し、その背景にある課題を明らかにした。b.事例調査：前述a.で構築した理論を用いて、紅河ハニ棚田を対象として事例調査を行った。現地に存在する文献および二次的資料の収集と分析を行ったのち、その分析結果をもとに、フィールドにおける実証調査を行った。参与観察、半構造化インタビューなどを行い、さらに、それらの調査結果をもとに作成した調査項目を用いて、再度現地にて構造化アンケート調査を行った。最終的にこれらの質的データ、量的データの双方を用いて分析し、考察を行った。

### 4. 結果

#### a.文献調査の結果

①文化的景観の定義と意義：文化的景観という概念は、19世紀末に自然景観と区別するために提示されたが、1992年に世界遺産に登録されたことで世界に注目された。ユネスコにより「人間と自然との相互作用によって生まれた共同作品である」と定義される。文化的景観は、人間が自然環境と共存するという持続可能な理念を具現化したものであることから、このような人と自然の共生が破綻してきた現代においては重要な意味を持つ。

②文化的景観である棚田の定義と保全の課題：世界遺産に登録された棚田は文化的景観カテゴリーの「2.2.現在でもその役割が継続する景観」とされる。棚田は、主に東北・東南・中央アジアに広く分布し、自然的意義（生物多様性の保全、国土の保全）と文化的意義（文化資源の提供、伝承文化の継承）を有しているが、一枚あたりの面積が少ない、草取り・草の作業に多くの労力を要するなど8つの特性によって、効率を重視した現代社会においては、消滅の危機がある。

③棚田における観光形成：棚田における観光が形成してきた要因は、1)近年農村景観の自然的、または文化的意義が外部（都市）に認識されることにより、農村景観が注目されてきたこと、2)世界的な観光産業の増大による観光の多様化で、過去に観光資源と認識されてなかった棚田景観も、価値ある観光資源と認識されてきたことがある。このように、棚田景観が観光資源とされる要因は棚田それ自体の価値のほか、観光市場の需要変化、地域発展の需要とも関連している。

④観光からの影響の分析：観光は、棚田地域に肯定的・否定的双方の影響を与えるが、世界遺産コルディレラ棚田の事例により、肯定的影響を拡大しつつ否定的影響を排除していく施策が地域の文脈に合わせて可能であることがわかった。また、日本の棚田保全の先進事例からも、地域住民の棚田保全、および棚田に関する文化保全への認識・関心を高めることで、観光活用による肯定的影響が拡大できることが示唆された。

#### b.事例調査の結果（紅河ハニ棚田の事例）

①紅河ハニ棚田の形成と地域住民（少数民族）との関わり：紀元前からの棚田の形成と地域住民との関係性を時系列に整理した結果、特に、棚田との「精神的つながり」が重要であることが示唆された。

②世界遺産登録後の保護計画と観光計画：ハニ棚田が世界遺産となってからの保護計画と観光計画とは乖離があることがわかった。特に、本来保護が優先されるべき核心地域において観光開発も推進されており、また、主体となるべき地域住民が、ほとんど観光計画に参画していないことが明らかとなった。

③地域住民の棚田景観への認識と動機：過去と参照すると、地域住民が棚田への物質的欲求が弱くなっている結果、耕作方式が変わることが起きているが、棚田への精神的欲求は未だに強いことがわかった。棚田の所有権が維持されている動機の多くは、この精神的つながりによるものであることが示唆された。

④地域住民の棚田観光に対する認識：観光業の発展により、紅河ハニ棚田地域に経済的利益を生んでいることがわかったが、地域住民（農民）の中にも、経済発展をもたらすことを期待して観光発展を支持している人が少なくないことがわかった。また相関分析を行った結果、地域住民の観光への態度に影響を与えていると思われる要因として、棚田耕作活動

の有無、または次世代へ継承していく意志とに関連性が示唆された。

## 5. 考察と提言

文化的景観においてその概念が発展してきたこと、およびその保全が注目されてきたことは、近年になって人と自然との関わりに対する認識が高まった結果である。それに従い、現在世界遺産に登録された棚田景観も増えており、過度に観光開発・観光推進する様子が見られる。棚田景観を世界遺産に登録する目的は、観光振興および観光発展ではないことから、世界遺産の本来の目的に立ち戻る必要がある。紅河ハニ棚田地域においても、観光の目的を、世界遺産の保全・保護のためという原点に戻らせることがもっとも重要である。これは、山村（2011:41）が、「観光とは、保全すべき世界遺産の価値を伝えるための「手段」として位置づけるべきものである」と指摘していることに通じる。紅河ハニ棚田においても、ユネスコが評価した、「森林、水系、棚田と村の四つの要素が共に構成するシステム」の重要性を鑑みれば、この地域の住民である少数民族と、自然との長きにわたる相互作用を大衆に示すための観光活動が望ましい形であり、地域住民の伝統的文化を壊すことなく、むしろ精神的欲求を満たすように観光が計画・実施されるべきである。実証調査の結果から得られたように、紅河ハニ棚田地域において、現在も地域住民の棚田に対する精神的欲求が強いことは、今後の紅河ハニ棚田の維持のために肯定的かつ重要な点である。世界遺産である棚田の保全を最優先とした観光を実現していくためには、観光が地域住民の精神的欲求、すなわち伝統的文化や思想を傷つけるようなことがあってはならない。そのための提言として、以下のことが望まれる：

- 1) 地域住民を主体とした棚田の保全、また観光開発を行う：地域住民が、棚田の保全と観光計画に参画していく必要がある。そのために地域住民への能力開発を行い、また、定期的に地域住民の棚田への精神的欲求とその変化を把握すべきである。
- 2) 観光が地域住民の伝統的文化や思想（精神的欲求）を傷つけるようなことがあってはならない：ハニ棚田の保全と観光において、文化的要素が占める比重を大きくし、インタープリテーション（専門的ガイド）を導入する必要がある。
- 3) 観光により失われつつある棚田への物質的欲求を補っていくことも留意する：地域住民が、棚田や近隣の自然環境からの利益を上げられるように、観光によって農産物の付加価値を高め、伝統的な農業の維持・発展を推進する。

## 6. 今後の課題

本研究では、紅河ハニ棚田を事例調査したが、一事例の調査であるため、今後世界遺産に登録された他の事例、フィリピン・コルディレラ棚田やインドネシア・ジャティルウイ棚田の現地調査を行うことによって、文化的景観である棚田モデルの理論化、および棚田の保全と観光のあり方における一般論を提示する必要があると考えている。また、複数事例の現地調査によって、文化的背景における異なる民族の、棚田への物質的欲求と精神的欲求とがどのように違うのかを比較研究することも、今後の棚田保全に寄与すると考える。

・参考文献：山村高淑(2011)「世界遺産－その理念とツーリズムにとっての意義」『観光学キーワード』有斐閣、p.41

